

『徒然草鉄槌』の注釈態度

1) 島内裕子

要旨

『徒然草鉄槌』は、青木宗胡が著したとされ、一六四八年に刊行された『徒然草』の注釈書である。江戸時代に書かれた数々の『徒然草』の注釈書の中でも、重要な位置を占めている。

『徒然草』に関する最初の注釈書は、『徒然草寿命院抄』である。秦宗巴が著し、一六〇四年に刊行された。次いで、林羅山が一六二一年に著した『野槌』となる。

この二つに次ぐ三番目の注釈書が、『徒然草鉄槌』である。その後、挿絵付きの注釈書としては、松永貞徳の『なぐさみ草』（一六五二年刊）や、著者未詳の『徒然草吟和抄』（一六九〇年刊）、苗村丈伯の『徒然草絵抄』（一六九一年刊）なども登場した。『徒然草絵抄』には、語釈がなく、挿絵のみで『徒然草』の各段の説明が試みられている。このように、『徒然草』の注釈書は、多彩な展開を見せた。

その後、各務支考は、それまでの注釈書概念を越える、長編評論として、『つれづれの讚』（二七一年自跋）を著した。

以上に挙げた注釈書については、これまでの拙稿で取り上げて、考察してきたが、初期の注釈書に属する『徒然草鉄槌』の考察は行ってこなかった。そこで今回は、『徒然草鉄槌』を中心に据えて、『徒然草鉄槌』がどのような特徴を持ち、その前後に刊行された『徒然草』の注釈書群と、どのような関係性を持っているのか、これまで拙稿で論じてきた各種の注釈書とも関連させながら、考察することとした。

考察は、次の三点から行う。第一に、『徒然草鉄槌』と、それ以前の二つの注釈書を比較し、『徒然草鉄槌』は『野槌』の抜き書きであると言われてきた通説を検証すること。そして、『徒然草鉄槌』が『野槌』よりも、むしろ『徒然草寿命院抄』を参照することが多いことを確認できたので、そこから『徒然草鉄槌』の注釈態度を明らかにした。

第二に、『なぐさみ草』と、『徒然草増補鉄槌』（山岡元隣著、一六六九年刊）を取り上げて、『徒然草鉄槌』の影響力を考察した。

第三に、歌人であり、国学者である契沖（一六四〇～一七〇一）が、『徒然草鉄槌』に書き込んだ「契沖書き入れ」（成立時期は一六九〇年以前とされる）を検討し、契沖が『徒然草鉄槌』を通して、『徒然草』をどのように読解したか、特に、契沖による独自の解釈箇所に注目した。

『徒然草鉄槌』は、刊行年度の異なる刊本の種類も多く、江戸時代に広く流布した『徒然草』の注釈書であった。本稿では、その人気の理由の一端を、解き明かしたい。

はじめに

『徒然草』に関する最初の注釈書は、一六〇四年（慶長九年）に刊行された、秦宗巴による『徒然草寿命院抄』であり、次いで、一六二一年（元和七年）に林羅山による『野槌』が登場した。これらに次ぐ三番目の注釈書が、『徒然草鉄槌』である。『徒然草鉄槌』の刊行は、一六四八年である。著者は青木宗胡とされるが、宗胡の経歴は未詳である。江戸時代に書かれた数々の『徒然草』の注釈書の中でも、初期に刊行され、以後、版を重ねた点で、重要な位置を占めている。

私は、『徒然草』注釈書の研究を行ってきたが、『徒然草鉄槌』（以後、多くの場合、『鉄槌』と略称）については取り上げてこなかった。今回は、『鉄槌』を中心に据えて、『鉄槌』がどのような特徴を持ち、その前後に刊行された『徒然草』の注釈書群と、どのような関係性を持っているのか、これまで拙稿で取り上げてきた、各種の注釈書とも関連させながら、考察することとした。

『鉄槌』の特徴は、後述するように、頭注スタイルを採っていることである。そのわずか四年後の一六五二年（慶安五年）には、挿絵付きの注釈書として、松永貞徳の『なぐさみ草』が刊行されて、新しい潮流が生まれた。その後、やや刊行時期が遅れるが、著者未詳の『徒然草吟和抄』（一六九〇年刊）にも挿絵が付いている。『吟和抄』に踵を接して、苗村丈伯の『徒然草絵抄』（一六九一年刊）も登場した。『絵抄』には、語釈がなく、挿絵のみで『徒然草』の各段の説明を試みるという点が新機軸であり、画期的な注釈スタイルと言えよう。その後、各務支考は、それまでの注釈書概念を越える、長編評論として、『つれづれの讚』（二七一年）を著した。

以上のことから、『徒然草』注釈書の展開が、多彩であり、それぞれが独自の工夫をしながら注釈を進めてきたことが垣間見られよう。適宜、そのことにも

触れつつ、今回の考察は、次の三点から行う。

第一に、『徒然草鉄槌』と、それ以前の二つの注釈書を比較し、『徒然草鉄槌』は『野槌』の抜き書きであると言われてきた通説を検証する。第二に、『なぐさみ草』、および、『徒然草増補鉄槌』（山岡元隣著、一六六九年刊）を取り上げて、『鉄槌』の影響力を考察する。

第三に、『鉄槌』の影響力という観点から、歌人であり、国学者である契沖（一六四〇～一七〇一）が、『鉄槌』に書き込んだ「契沖書き入れ」（成立時期は、書写者による奥書から、一六九〇年以前と考えられている）を検討し、契沖が『鉄槌』を通して、『徒然草』をどのように読解したか、特に、契沖による独自の解釈箇所を注目して考察する。

『徒然草鉄槌』は、刊行年度の異なる刊本の種類も多く、江戸時代に広く流布した『徒然草』の注釈書であった。本稿では、その人気の理由を、解き明かしたい。

一 『徒然草鉄槌』の特徴と、先行注釈書との比較

(1) 『鉄槌』、および、初期の徒然草注釈書の概観

『徒然草鉄槌』と類似する書名に、『増補鉄槌』がある。この『増補鉄槌』は、山岡元隣が著した『徒然草』の注釈書で、一六六九年（寛文九年）に刊行された。その冒頭部に、「諸抄之次第」と題して、『徒然草』の諸注を、『壽命院抄』以下、『文段抄』まで九種挙げて、その最後に自身の『鉄槌増補』を置いている。諸注を挙げるに際しては、書名・巻数・著者名・特記事項・刊行年を記すが、著者名が書かれていないものもある。『野槌』を例に取れば「十四卷 道春作」と書き、以下は二行書きの割り注で、「壽命院ノ抄ニ、広ク和漢ノ故ノ事ヲ加フ。元和七年辛酉年」とある（割り注は、読み下し文で記し、句読点を付け、行の区切りに／を付けた）。『野槌』は『壽命院抄』に和漢の故事を加えていることを指摘し、簡潔に紹介を記す。元和七年辛酉年は、西暦一六二二年である。

この『野槌』の紹介の次に位置するのが、『鉄槌』である。『鉄槌』に関しては、ごく短く、「四卷 是、野槌ノ拔書也」とだけ書かれている。「拔書」の横に片仮名で、「ヌキガキ」とある。著者名は書かれていない。

九番目の『文段抄』は、「七卷 季吟先生作也」とあり、割注で、「寛文七年十二月吉日」とある。山岡元隣（一六三二～一六七二）は、北村季吟に和歌や俳諧を学んだので、季吟先生と書いている。自身の注釈書に関しては割注で、「件

ノ鉄槌ニ、右ノ諸抄ノ要領ヲ、之ニ加ヘ述ブルニ、世ノ俗ノ述語ヲ以テス。是、初学ノ士、曉ル易^{サトヤスカラシ} 為ナリ」と記す。

おそらく、『増補鉄槌』に書かれている、「四卷 是、野槌ノ拔書也」という評の影響の下に、『鉄槌』と言えば、『野槌』の抜き書きであるとする先入観が固定化したのであろう。ただし、『鉄槌』を『壽命院抄』や『野槌』と比較すると、必ずしも『野槌ノ拔書也』とは言えず、むしろ『壽命院抄』の抜き書きといつても良いほど、『壽命院抄』による注釈が多い。

本稿で使用する『鉄槌』は、架蔵の寛文十二年（一六七二年）刊、洛下（京都）の西沢太兵衛版、四卷四冊本である。冒頭に総説風の解説はなく、ただちに、序段から始まる。これは、『徒然草』の注釈書としては、珍しいことである。

徒然草注釈書における総説や系図の有無は、注目したい。ちなみに、『壽命院抄』では冒頭部に、五項目の箇条書きによって、作者である兼好の略歴や、『徒然草』は儒釈道を兼備し、清少納言枕草子を模し、源氏物語の言葉を使って書いていることなど、いずれも簡潔ながら、『徒然草』の本質に関わる重要事項を書きおり、その他に「下部系図」も掲載している。

二番目の『野槌』も同様で、総説が冒頭部に付き、さらに兼好の勅撰集入集和歌や自讃歌なども集成して掲載している。系図も『壽命院抄』より詳しく書かれている。『野槌』は、『壽命院抄』の冒頭部を踏襲しつつ、兼好和歌の集成に、新機軸が見られる。

『壽命院抄』と『野槌』という先例があるにもかかわらず、総説も系図も踏襲していない点で、『鉄槌』の特徴として、まず第一に挙げられる。『徒然草』の注釈書における、冒頭部における総説等の有無は、これまであまり、注意を払われてこなかったように思うが、この点に留意したい。

次に、『壽命院抄』と『野槌』の注釈態度について、拙稿に依りながら、略述しよう。『壽命院抄』は、難語を切り出して説明を加える方式であり、『徒然草』の本文は掲載されていない。この点は二番目の『野槌』以下に踏襲されることなく、『徒然草注釈書』は本文付きで注釈している。江戸時代以前の書物は、書写によって伝来してきたが、江戸時代になると、木版印刷によって書物が広く流通するようになったことは、大きな違いである。そのことが、『徒然草』の浸透に大きな役割を果たしている。これは、『徒然草』に限ったことではないが、『徒然草』の場合、他の作品と比べて格段に注釈書の種類が多く、さらには、同一の注釈書においても、何種類もの板行があった。今回取り上げる『鉄槌』は、まさにそのような例である。

江戸時代以前の作品を読む際に、語句の意味や地名や人名に対する説明があれば、作品を味読できる。注釈書の需要が高まるのは自然なことであろう。「徒然草」は、王朝時代の散文作品と比べて、基本的に文章が理解しやすい。初期の二つの注釈書の著者が、『源氏物語』と和歌に通暁していた秦宗巴と、当時最高の知識人である儒学者の林羅山だったことは、『徒然草』の文化的・文学的な価値を保証したはずである。それは『徒然草』にとって、幸運であった。

松永貞徳による徒然草注釈書として、『なぐさみ草』が刊行された時、『徒然草』のほとんどの段に挿絵が付き、「大意」として各段の内容の要約とその段の主旨が書かれた。このような要約は、『寿命院抄』にも書かれているが、このまとめが当時の人々の日常に寄り添った書き方で示されたことにより、『徒然草』が「新古典」として、近世初期の人々に広く受け入れられる基盤が、確実に形成された。しかも松永貞徳は、古今伝授の地下伝授を受けた文化人であり、貞門俳諧の創始者であった。江戸時代初期の文学・文化に及ぼした貞徳の存在はまことに大きかった。ちなみに、『なぐさみ草』以後に相次いだ徒然草注釈書のうち、著者名が判明しているものは、貞門の人々が多い。そのことは、あるいは、「源氏見ざる歌詠みは、遺恨のことなり」という藤原俊成の言葉に倣って言うならば、「徒然草見ざる俳人は、遺恨のことなり」と言えるような、文学常識になっていたのではないだろうか。そのような風潮が一般化して、貞門に学んだ人々、あるいは、その後貞門から離れたとしても、徒然草注釈書を刊行する人々が、途絶えることなく続き、それを読んで『徒然草』に学ぶ人々の増加もあったのではないだろうか。

(2) 『鉄槌』の流布と「絵入り本」の存在

次に、『鉄槌』の流布について触れたい。『鉄槌』は、『寿命院抄』『野槌』『なぐさみ草』という三種の徒然草注釈書と異なり、著者が伝未詳である。けれども、著名な著者による注釈書でないこと、あるいは著者が不明であることは、『鉄槌』の場合、マイナス面とはならなかったと思われる。流布の広がりやそれを証明している。

この点について、小松操が「『徒然草』鉄槌考略¹⁾」という論文(以下、「小松論文」と略称)で、『鉄槌』の諸本研究を行っているのは、その間の事情に注目したからであろう。小松論文では、第一種本から第八種本までに分類している。刊記で見ると、慶安元年・慶安二年・明暦三年・寛文九年・正徳四年・寛文十二年・延宝七年・宝永三年である。一六四八年から一七〇六年まで、六十年近くの

間、板行が続いたのだった。その中で第七種本に挙げられている貞享二年(一六八五年)本は、挿絵十七葉を含む絵入本とのことである。他の『鉄槌』には絵入本という記載がないので、興味を引かれる。

『鉄槌』紙面のレイアウトは、『鉄槌』が流布するにあたって、大きな役割を果たしたのである。『鉄槌』は「首書」(頭書とも)、すなわち頭注を持つ本であった。このことが、読みやすさの点に、大きく寄与した。

頭注部分は一面の上部三分の一、本文は三分の二のスペースである。架蔵の『鉄槌』四卷四冊(大本、縦・約二十六センチメートル、横・約十八センチメートル。寛文十二年刊)は、一面が十一行、頭注は二十二行で、このレイアウトにより、頭注のスペースに書き込める語釈も、おのずと簡潔にならざるをえない。『鉄槌』の頭注を見てゆくと、先行する『寿命院抄』と『野槌』との双方を勘案して、必要最小限によく集約された注釈になっているのが見事であるが、むしろ、頭注形式によって、おのずと導かれる簡潔さであるとも言えよう。なお、紙面により、頭注が少ない場合などは、本文が紙面の上部から書かれていたり、逆に、頭注が詳しい箇所では、本文スペースまで使って、頭注の細かな字体でざつしり書かれている場合もあり、自在である。

『鉄槌』の頭注は、『徒然草』の本文から切り出した語句をまず示し、一字分空けてから、語釈を書いている。本文語句の切り出し方は、ほとんどの場合、『寿命院抄』に挙げられている語句の順に取り上げて、頭注スペースに合わせて、説明文を圧縮している。したがって、従来言われてきたような『野槌』の抜き書きというよりも、『寿命院抄』の語釈を、頭注形式に組み替えていると理解した方が、実情に即しているように思われる。

ところで、小松論文を紹介した際に、第七種本として挙げられていた「(頭書)つれづれくさ」の伝本の内、富士文庫蔵本(原簽)を、富士市立図書館のデジタルライブラリーにより、閲覧することができた。四卷四冊の第一冊と第四冊に挿絵が入っている。小松論文では「挿絵十七葉」とあるが、第一冊に十一葉、第四冊に八葉が入っているので、合計十九葉となる。また、本文の行数も八行ではなく、十二行である。この本について小松論文で、「図柄は独特」「稀観本である」と書かれていたが、画面を通して、その全貌を見ることができたので、この十九葉の挿絵の特徴を略述しておきたい。

私は、『徒然草』を描いた絵画を「徒然絵」と名付けて研究する過程で、松永貞徳の『なぐさみ草』にほぼ全段にわたって書かれている挿絵が、「徒然絵」の基準作として機能することを提唱した。拙稿『徒然草吟和抄』の注釈書態度

において、『吟和抄』が徒然草注釈書の中でも珍しい、挿絵入りの注釈書であることを論じた際にも、『なぐさみ草』の挿絵との類似性と相違点に着目した。²⁾なお、小松論文の第七種本として挙げられていた「(頭書) つれづれくさ」の伝本の内、富士文庫蔵本(原簽)の名称を、ここでは、絵入りの頭注本であるという特徴を明示するために、便宜上『絵入り頭書 鉄槌』と呼称したい。

『絵入り頭書』鉄槌』の挿絵に通し番号を付けて、その絵が『徒然草』の第何段であるか、および、図柄の特徴を示せば、次のようになる。

- ① 序段。墨染衣の兼好が、草庵で寝そべっている描き方が、珍しい。
- ② 第二段。「衣冠より馬・車に至るまで」の絵画化。『なぐさみ草』と類似するが、男性貴族を二人描く。
- ③ 第七段。濡縁に座り、外を眺める男性貴族。『なぐさみ草』は人物なし。
- ④ 第八段。図柄は『なぐさみ草』と似るが、女性は膝上まで裾を上げている。
- ⑤ 第十段。濡縁から月を眺める後姿の女性。『なぐさみ草』は寢殿と鳶の図。
- ⑥ 第十九段。満開の桜と二羽の鳥と、佇む二人の男性貴族。独自の図柄。
- ⑦ 第二十三段。図柄は、遣水にかかる小さな橋の上に佇み、前方の寢殿を眺める男性貴族の姿。
- ⑧ 第二十六段。「昔見し妹が垣根」の図柄。男性貴族を一人描く。
- ⑨ 第三十九段。法然上人と対話する男性貴族。他に二人僧侶が入るのが独自。
- ⑩ 第四十七段。清水寺参詣の尼と語る男を描き、『なぐさみ草』と類似。
- ⑪ 第五十一段。亀山殿の水車が回るのを眺める人々が、室内に二人、外に一人いる構図。ここまでが第一冊。
- ⑫ 第八十八段。図柄は独自で、身分のある僧侶と男女の三人が対座する。
- ⑬ 第九十五段。田圃の中の水で地蔵を洗う内大臣を見つけた三人。『なぐさみ草』と類似。
- ⑭ 第九十六段。馬上の貴族とその従者が鳥居に向かって進む。独自の図柄。
- ⑮ 第二百六段。牛が裁判中に闖入し、役人たちが驚く。『なぐさみ草』と類似。
- ⑯ 第二百九段。濡れ縁に座る人物に、室内から何か指示する主人。独自構図。

- ⑰ 第二百十四段。琴を前にして、池の蓮の花を眺める男性。中国の王儉の故事。
 - ⑱ 第二百二十八段。千本釈迦堂での行事を見物する人々。『なぐさみ草』と類似。
 - ⑲ 第二百四十三段。最終段で、仏の起源を話し合う兼好と父、二体の仏も描く。
- 以上の⑫から⑲が、第四冊所収の挿絵である。

以上のことから、『絵入り頭書』鉄槌』の挿絵は、基本的には『なぐさみ草』と似るが、同一というわけではなく、登場人物を増やしたり、景色の描写などに工夫が見られた。全体的に人物像が多く描かれている。

(3) 『鉄槌』の注釈態度

先にも紹介したように、『増補鉄槌』に書かれている、「四卷 是、野槌ノ拔書也」という評が意味する内容を検証してみたい。すなわち、もし、『鉄槌』が『野槌』の抜き書きであるとしても、『野槌』以前に『寿命院抄』が成立している以上、『野槌』の抜き書きと認定される箇所が、さらに遡って『寿命院抄』にすでに書かれている場合は、『寿命院抄』からの抜き書きと言うべきであろう。

このことを検証することは、『寿命院抄』と『野槌』との関係性を明らかにすることに繋がる。かつての拙稿においては、それぞれの注釈書の注釈態度に注目する考察であったので、複数の徒然草注釈書の関係性について、十分な比較検討は行つてこなかったため、本稿に置いて、『寿命院抄』と『野槌』を比較検討してみよう。

『寿命院抄』は、徒然草注釈書の最初のものであるにもかかわらず、多数の注釈が書かれており、それ以後の注釈書において新たに指摘されたことは、少ないと言つてよいほどである。なぜ『寿命院抄』が多数の注釈を付けることが出来たかと言えば、それは徒然草自体が、王朝時代の『源氏物語』や『枕草子』を撰取しているからであり、また徒然草の著者である兼好が、二条派の歌人であったことから、中世和歌の歌学書である『八雲御抄』の記述を援用することによって、『徒然草』が読み解けるからである。『八雲御抄』によって注釈を付けている箇所は九例あるが、それらはすべて『野槌』に踏襲されている。『野槌』には、『寿命院抄』を参照したという記述は見えないが、今述べた九例の撰取から見ても、

『野槌』の注釈が、『寿命院抄』に多くを拠っていることは、紛れもない。『寿命院抄』の注釈の中で、注目すべきは、『枕草子』との関連を指摘する箇所が、かなり見受けられる点である。このことについては、後述する「契沖書き入れ」の考察の時に触れることにして、今は『寿命院抄』が『徒然草』と『枕草子』との関連に注目しているというこの指摘にとどめたい。

『寿命院抄』の注釈の特徴として、もう一言付け加えるならば、『河海抄』による注釈がかなり見られることである。数ある『源氏物語』の注釈書の中から、『河海抄』を参照することが多い。

以上のことから、『寿命院抄』の注釈の基盤となっている参考書は、和歌に関しては『八雲御抄』、『源氏物語』については『河海抄』、そして『徒然草』という作品自体との関連性について『枕草子』を挙げることが多いという特徴が見られる。これらのことは、すでに拙稿「『徒然草寿命院抄』の注釈態度」において述べたことの要点であるが、『野槌』における注釈の源泉を考えるに当たり、『八雲御抄』、『河海抄』、『枕草子』の三作品の撰取状況に注目して、『野槌』と『寿命院抄』との関連性を見て行くことはある程度有効であると考える。『寿命院抄』には『徒然草』の本文自体は掲載されず、注釈箇所のみ短く切り出して注を付けている。そのほとんどを、『野槌』が踏襲した。

『鉄槌』が、『野槌』の抜き書きであるかどうか、という点を考察するに当たり、今、述べたような、『八雲御抄』、『河海抄』、『枕草子』の三作品の撰取状況に注目してみよう。ここでの考察は、拙稿「『徒然草古注釈書の方法』——『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」⁴で述べたことと、一部重なる部分があるが、本稿では、『野槌』の注釈態度と『寿命院抄』の注釈態度との比較という観点からの捉え直しを試みたいと思う。

『野槌』の注釈態度の特徴は、大きく捉ええると次の三点に集約できる。第一に、『寿命院抄』の注釈を撰取したことによって、『野槌』以後の徒然草注釈書に、『寿命院抄』において指摘された「語釈」が継承されたこと。ここで語釈というのは、言葉の意味をわかりやすく解説すること、および、徒然草の表現の背景に見え隠れする出典の指摘も含む。出典の指摘という点では、すでに『寿命院抄』において主として和歌と『源氏物語』を出典とする箇所はほとんど指摘されているが、儒学者である林羅山は、漢詩文の典拠を多数付け加えていることが、『野槌』における新機軸であった。

第一の特徴が『寿命院抄』の継承と補充という点であったのに対して、第二の特徴は、『寿命院抄』の注釈を継承せず、ほぼすべてカットしている面がみられ

ることである。徒然草の作品解釈において『寿命院抄』が、徒然草の章段間の連続性に注意を喚起しているのに対して、そのような視点は『野槌』には見られない。この点は、本稿の中心テーマである『徒然草鉄槌』の注釈態度を考察する際に注目すべき点となろう。すなわち、『鉄槌』が『野槌』の抜き書きであるかどうかの判定材料の一面になると思うからである。

『野槌』の第三の特徴は、『寿命院抄』と比べて、注釈が全体的に詳しくなっていることである。『野槌』では、『寿命院抄』が指摘した出典についても、そこで切り出されている出典について、その前後も含めて長く引用しているのは、羅山が『寿命院抄』の注釈に関して、原典にあたって確認したうえで注釈に取り入れているということであり、そのような注釈態度は、「読む注釈書」としての『野槌』の特徴を浮き上がらせる。このことは、「注釈書はどのようにあるべきか」という大きなテーマの考察にも繋がるであろう。

先取りして述べるならば、「詳細な注釈書」と「簡略な注釈書」の分岐点がどこにあるかということである。このように注釈書の性格を二分した場合、『野槌』はあきらかに「詳細な注釈書」の部類に属するのであるが、その詳細さは、今述べたように、原典の引用範囲を大きく採るところから生じることもさることながら、「類似例の列挙」という特徴にもよると思われる。すなわち「類似例の列挙」が『野槌』の顕著な特徴として挙げられる。ただし、徒然草注釈書を見渡してみても、このようなスタイルは、『鉄槌』の注釈態度も含めて、『野槌』以後殆ど継承されなかった。

『鉄槌』は、『寿命院抄』の語釈項目とその注釈内容を、頭注スペースに合わせて簡略化しつつ撰取しているが、『野槌』による詳しい出典調査の成果である長文の注釈のすべては、撰取できなかった。しかし、このことは『鉄槌』の短所ではなく、先に述べたように、注釈書の二つの方向性のうち、簡潔でわかりやすい注釈書態度を選択した結果であり、そのことが功を奏して、『鉄槌』の流布に繋がった。しかも、『鉄槌』の注釈書態度は、早くも、第四番目の注釈書である『なぐさみ草』に大いに影響した点について、ここで触れておきたい。

『なぐさみ草』は、最初の『寿命院抄』において、ごく短く『徒然草』の各段の要旨を書いていたことを撰取し、さらに敷衍した「大意」を付けた。その中には、当時の読者に語りかけるかのような、日常教訓的な視点も披瀝したところに新しさがうかがわれる。そして、多くの段に挿絵を付けたことも、『徒然草』への理解や親しみやすさを、大いに増大した。

けれども、『なぐさみ草』の語注自体は、注意して読んでみると、『鉄槌』の頭

注そのままと言えるほどに、酷似している。すなわち、三番目の『鉄槌』があったからこそ、『なぐさみ草』の語注部分は、容易に出来上がり、その分の余力を持って、当時の時代性に寄り添う物の見方を大意に書き込んだり、多くの挿絵を入れるという発想も湧き上がったのではないだろうか。このように述べると、『鉄槌』に肩入れし過ぎてしまうように思われるかも知れないが、本稿において、最初の『寿命院抄』から『野槌』への影響、そしてそれらを活用し、取捨選択することによって、三番目の『鉄槌』が成立したことは紛れもない。そのように考えるなら、『なぐさみ草』の成立の一端を担ったのが『鉄槌』だったことも、忘れてはならないだろう。

さらには、『なぐさみ草』の新機軸であった挿絵が、今度は『鉄槌』の刊本の中で参照されて、さきほど紹介した「絵入り頭注」版の『鉄槌』も生まれてきた。このような、注釈書同士のつながりの広がりとは相俟って、『徒然草』の多様な注釈書群が出現し続けたと言えよう。

三 山岡元隣の『徒然草増補鉄槌』と『徒然草鉄槌』

山岡元隣による『徒然草増補鉄槌』は、その書名からして、『徒然草鉄槌』との関係性が強いと思われるが、そのことをここで考察してみたい。

ところで、江戸時代に刊行された数ある徒然草注釈書の中でも、『徒然草諸抄大成』（一六八八年刊）は、それ以前の十三種に及ぶ、徒然草注釈書を引用書目に挙げて、まとめ上げた総合的な注釈書であり、諸注釈書を通覧するに際して、便利である。けれども、その引用書目の中に『増補鉄槌』が入っているが、『鉄槌』入っていない。そのことは、『鉄槌』が『増補鉄槌』に吸収合併されているという認識によるのであろうか。確かにこの二つの書名だけを比べると、そのような印象を受けるが、両書比べてみるとそうとも思えないのは、『鉄槌』以後の諸注釈書を追補したのが『増補鉄槌』であるという序文を、元隣が書いているからである。

山岡元隣は、『増補鉄槌』（一六六九年刊）の二年後に、俳文集『宝蔵』（一六七一年刊）を刊行している。この『宝蔵』と『徒然草』の関連については、雲英末雄「俳文と先行文学——『宝蔵』と『徒然草』をめぐって⁵⁾」がある。同論文は、『宝蔵』の文体が徒然草に多くを依つて指摘している。その趣旨はその通りであるが、書かれている内容は、生活の身辺にある日用品などを主題にして、ユーモラスな短編和文となっている。『宝蔵』における先行文学の影響として、

て、日本文学からは『徒然草』『方丈記』『伊勢物語』『新古今集』を挙げ、中国の『莊子』『古文真宝』『論語』『孟子』も挙げているが、これらの中で一番影響力を及ぼしているのが『徒然草』であると結論付けている。

これらの先行文学に入っていないのであるが、『宝蔵』における『枕草子』の列挙章段の影響も挙げたい。なぜならば、後述する「契沖書き入れ」において、『枕草子』への言及が多いことと、間接的に繋がってくるからである。『徒然草』における『枕草子』との関係性は、徒然草注釈書の注釈態度を検討する際に、重要なポイントとなる。

四 「契沖書き入れ本」に見る『徒然草』への関心

『徒然草鉄槌』の余白に、契沖が書き入れた本があり、それを転写したものが、彰考館に残されていることが紹介されたのは、昭和四十年代の末になってからであった。⁶⁾江戸時代に、『徒然草』の注釈書が多数刊行されたことは、よく知られているが、契沖の書き入れ本は、あくまで書き込みであり、注釈書としてまとめられて出版されたものではないので、この書き入れ本が、その後十年余り経過した昭和五十一年に、『契沖全集』第十六巻に収載されてからも、徒然草注釈書の研究の中で、言及されることは、あまりなかったように思う。

かく言う私自身も、徒然草注釈書の研究の中で、『句解』や『吟和抄』については研究して、それぞれの注釈態度を考察したが、これまでこの書き入れについて触れたことはなかった。このたび、自分自身の徒然草注釈書研究を振り返ってみると、個々の研究における研究結果が、おのずと関連性を持つことに気づかされた。本稿で、ここまで、『鉄槌』の注釈書態度を、『寿命院抄』と『野槌』との関わりという観点から見えてきたことに鑑みて、契沖による書き入れが、他ならぬ『鉄槌』への書き入れであることに改めて思いを致すことにした次第である。

なお、本稿における契沖書き入れは、『契沖全集』第十六巻の目次では「書入二」という項目の中に収められており、目次では『竹取物語』以下、『倭名類聚鈔』まで、十二の書名が出ており、その中の九番目が『鉄槌』である。これらの書き入れについては、「契沖書入本」という名称が使われているが、本稿においては、『鉄槌』という徒然草注釈書に書き入れたことを具体的に示すために、「契沖鉄槌書き入れ本」とした。

今は「契沖鉄槌書き入れ本」に詳しく触れることはできないが、ここでは主として、かつて『徒然草句解』の注釈態度を研究した際に、気づいた⁷⁾、『枕草子』

に対する『句解』の言及と比べてみたい。

「契沖鉄槌書き入れ本」の全体的な特徴を最初に述べるならば、語釈が詳しいことが先ず挙げられる。そのことは、『徒然草』序段への書き入れに早くもよく表れている。冒頭部の「つれづれなるままに」に関して、まず最初に『枕草子』の跋文を引いているのはそこに「つれづれなる里居のほどに」とある表現に注目したからであろう。『枕草子』の本文の引用は『春曙抄』に近いかと思われるが、『春曙抄』の本文そのままではない。『枕草子』跋文に書かれている「涙せきあへず」について、『古今和歌集』の「枕より又しる人もなき恋を涙せきあへずもしつるかな」を引くが、この引き歌は『春曙抄』でも指摘している。序段の「つれづれなるままに」は、『源氏物語』須磨・夕顔・葵・橋姫を引き、「つれづれ」の語義や漢字表記も考察する。

その他にも、「日くらし」「すずりにむかひて」「よしなしごとを」「そこはかとなくかきつくれば」「ものぐるおしけれ」の順に、序段の表現に対して逐一、他の作品から用例を挙げており、序段への書き入れを読んだだけでも、契沖がいかに、『徒然草』の表現に関心を持っているか、そして、用語の用例列挙に熱心であるかがわかる。契沖の目から見ると、『鉄槌』の語釈が余りにも簡略に思えたのであろうか。また、『鉄槌』には書かれてない、兼好にいたる系図も書き入れている。このような態度は、羅山の『野槌』を思わせる。

第一段には、『徒然草』の原文自体に、「清少納言が書けるも」と出てくるので、契沖も『枕草子』の「思はん子を法師になしたらんこそ」から始まる原文を、「いがはものゆかしからん」まで、長く引用しているが、「うちくひて」に「打ち悔ひて」という漢字を当てて解釈しているのは、「うち食ひて」とする解釈と異なる。『句解』では、『徒然草』の原文に「さらなり」とある箇所に対して、『枕草子』の「夏は、夜。月の比はさらなり」を用例として挙げている。同じ第一段であっても、注釈箇所が異なる。ちなみに、これは『枕草子』による注釈ではないのだが、『徒然草』第一段の末尾近くに出てくる「人の鏡ならんこそ」について、「契沖鉄槌書き入れ本」は、『徒然草』の他の段に書かれていることとの類同を「下に」と書いて、「人の才能は、ふみあきらかにして」の段を挙げている。これは、『徒然草』の中での照応を指摘しているのであり、『野槌』のように章段間の関連性に触れない注釈態度とは異なる。「契沖鉄槌書き入れ本」には、このような関連性の指摘はかなりあり、その点は、『寿命院抄』の注釈書態度と共通性が見られると言つてよいだろう。

「契沖鉄槌書き入れ本」の重要性については、遅まきながら、今回初めて気づ

いたので、詳しい研究は今後の課題としたいが、これが「書き入れ本」である点に着目するならば、エドガー・アラン・ポーの『覚書（マルジナリア）』のことが思い合わされる。これは吉田健一が翻訳刊行した本である。「契沖鉄槌書き入れ本」と『覚書（マルジナリア）』とを響き合わせることによつて、「書き入れ本」が持つ意義が、明確になるのではないかと思う。

今は、吉田健一の翻訳書『覚書（マルジナリア）』（昭和十年、芝書店）によつて、その冒頭部を引用することしかできないが、ここに書かれている言葉は、そのまま契沖の書き入れにも当て嵌まるように感じられる。

私は本を買ふ時、余白が大きく開けてあるのを買ふやうにする。余白の大きいことそれ自体が好きだからではない。読みながら起る考へだの、著者の意見と一致するかしないかの、その他一寸した評註を書入れることが出来るからである。書入れることが多過ぎて余白に入らない時には、別の紙に書いて、少量のところがかと、ごむによつて頁に貼り付ける。

引用文中の「ところがかと、ごむ」とは、辞書によると、植物性のゴムで、接着剤の役割をするようである。ちなみに、『契沖全集』第十六巻の解題によれば、「契沖鉄槌書き入れ本」にも、若干の貼紙があるという。

「書き入れ」とは、それを書き入れた人の考えたことや、感想・意見の表明であり、そうであるからこそ、「契沖鉄槌書き入れ本」には、契沖自身の『鉄槌』、ひいては『徒然草』から触発されたさまざまなことが犇めいて、そのことが重要性を帯びる。

おわりに

以上、『徒然草鉄槌』の注釈態度について、論述してきた。今回の考察では、『鉄槌』の『絵入り頭注』鉄槌』について紹介することができたのは思いがけないことであった。『鉄槌』の頭注が、『なぐさみ草』に撰取されていることについて、詳細な比較検討ができなかったのは反省事項である。その一方で、「契沖鉄槌書き入れ本」に『枕草子』が多数取り入れられていたことは、本稿による新たな注目点として、今後の研究に寄与できるのではないかと考える。『枕草子』からの原文引用が、どれもかなり長いのは、契沖が『枕草子』に通暁していることを示す。

『鉄槌』自体の注釈態度については、やはり版本の種類が非常に多いことが、何よりも、当時の人々にとって、読みやすさを提供した証しであろう。一つ一つの語釈を詳述するスタイルは、学問的な意義があるが、一般的な啓蒙書として、広く読まれたこと自体に意義があろう。契沖が書き入れたのが、他ならぬ『鉄槌』であったことも、象徴的である。注釈のあり方に、唯一の方法はないであろう。それぞれの注釈書が、個性的なスタイルで工夫を凝らすことが、注釈書のさらなる発展をもたらすと考えれば、いつの時代にも、新たな注釈書が書かれることが、その作品の命脈を持続させることを、改めて考えさせられた。

今回の研究は、『鉄槌』の注釈態度を、先行する『寿命院抄』と『野槌』との比較により浮かび上がらせることを目指したが、両者と逐一比較するところまでできず、結論も概略的なものとなった。けれども、『鉄槌』に続く『なぐさみ草』も含めて、四種の徒然草注釈書を総合的に大きく把握したことによって、それぞれの個性の違いもさることながら、これらの注釈書が、どのように影響し合っている、そこからどのような新しい視界が開けてきたかを、有機的なつながりとして描き出すことはできなかったのではないかと思う。

詳細な注釈書と、簡潔な注釈書という、二つの大きな潮流がある一方で、「契沖鉄槌書き入れ本」のように、簡潔な『鉄槌』に、詳細な書き込みをする行為からは、「注釈態度」というものの不思議な往還も垣間見られる。また、『鉄槌』に限ることではないが、頭注形式という簡潔な注釈スタイルは、現代における古典文学の注釈書にも受け継がれ、多くの読者に便宜を供している。

これらのことを思えば、『鉄槌』の著者について、詳しい経歴や学問修得の経緯は不明であるにしても、著者のことが知られている他の注釈書に劣らず、『徒

然草』の注釈史において、貴重な存在であったことが認識される。そして、『鉄槌』とは両極に位置する、詳細で長大な、『徒然草』と『枕草子』の注釈書を著した、加藤盤斎の注釈態度は何を指摘していたのか、そのことへの遙かな思いも湧いてくる。

研究の前途は遼遠であるが、これまで行ってきた徒然草研究の蓄積が、さらに新たな世界を切り開いてくれることを願って、今後とも精進してゆきたい。

注

- (1) 小松操「徒然草」鉄槌考略」(『金沢文庫研究』九十五号、昭和三十八年十一月)
- (2) 島内裕子「徒然草吟和抄」の注釈書態度」(『放送大学研究年報』第三十二号、平成二十六年)
- (3) 島内裕子「徒然草寿命院抄」の注釈態度」(『放送大学研究年報』第十六号、平成十年)
- (4) 島内裕子「徒然草古注釈書の方法——『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」(『放送大学研究年報』第十八号、平成十二年)
- (5) 雲英末雄「俳文と先行文学——『宝蔵』と『徒然草』をめぐって」(『文藝と批評』4号、昭和三十九年七月)
- (6) 久保田淳「徒然草の源泉——和歌」(『徒然草講座』第四卷、有精堂、昭和四十九年)
- (7) 島内裕子「徒然草句解」の注釈態度——卷之一を中心に——」(『放送大学研究年報』第三十一号、平成二十五年)

(二〇二三年十一月六日受理)

The Method of *Tsurezuregusa Tettsui* as a Commentary

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

Tsurezuregusa Tettsui (徒然草鉄槌、1648), attributed to Aoki Soko (青木宗胡), occupies an important position among the numerous commentaries on *Tsurezuregusa* (徒然草) written in the Edo era.

The oldest commentary on *Tsurezuregusa* is Hata Soha's *Tsurezuregusa Jumyoin Sho* (秦宗巴、徒然草寿命院抄) published in 1604, which was followed by Hayashi Razan's *Nozuchi* (林羅山、野槌) written in 1621.

The third oldest commentary is *Tsurezuregusa Tettsui*. Then followed Matsunaga Teitoku's *Nagusamigusa* (松永貞徳、なぐさみ草、1652) which is a commentary book with illustrations, anonymous *Tsurezuregusa Ginwashō* (徒然草吟和抄、1690), Namura Johaku's *Tsurezuregusa Esho* (苗村丈伯、徒然草絵抄、1691) etc. *Tsurezuregusa Esho* has no verbal notes and tries to explain each chapter of *Tsurezuregusa* by illustrations alone.

After that Kagami Shiko (各務支考) wrote *Tsurezure-no-San* (つれづれの讃、1711), a long critical study which transcended all previous concepts as to a commentary.

I have considered more or less the commentaries above mentioned in my previous monographs but left *Tsurezuregusa Tettsui*, one of the earliest commentaries, untouched. This time I will focus on *Tsurezuregusa Tettsui* and examine its characteristics and its relations with the commentary books on *Tsurezuregusa* published before and after it, referring to the various commentaries discussed in my previous monographs.

Consideration will be done from following three points of view.

Firstly, I will compare *Tsurezuregusa Tettsui* with its two forerunners. So far *Tsurezuregusa Tettsui* has been considered to be an extract from *Nozuchi*. I will verify this commonly accepted view and ascertain the fact that *Tsurezuregusa Tettsui* refers oftener to *Tsurezuregusa Jumyoin Sho* than to *Nozuchi*. In this way I would like to illustrate the method of *Tsurezuregusa Tettsui* as a commentary.

Secondly, I will compare Yamaoka Genrin's *Tsurezuregusa Zoho Tettsui* (1669) with *Tsurezuregusa Tettsui* and consider the influences of the latter on the former.

Thirdly I examine *Keichu Kakiire* (契沖書き入れ、made before 1690) which is marginalia written in a published copy of *Tsurezuregusa Tettsui* by Keichu (契沖、1640~1701), a Waka poet and Japanese classical scholar. I consider how Keichu understood *Tsurezuregusa* with the aid of *Tsurezuregusa Tettsui*, paying particular attention to the parts where Keichu offers his original interpretations.

Tsurezuregusa Tettsui was widely circulated in the Edo era, as is shown by its many editions published at different dates. This monograph tries to explicate a part of the reason of its popularity.